体育学部発展のために
－入試に関する過去９年間の変遷と将来的展望－

梅 村 義 久*

私が平成３年に体育学部講師となってから、９年の歳月が過ぎた。当時はちょうど第２次ベビーブーム世代が大学に入学するころであり、受験生にとって大学受験はまさに狭き門であった。その世代では200万人以上の人口がいたが、現在の受験生の世代では150万人程度であり、８年後には120万人にまで減少する。これに伴なって入学試験を取り巻く環境はどんどん変化していくように思える。私はこの９年で６年間入試委員を務めた。そこで、この９年間の入試に関する変化と、これからの入試改革に関する私見をまとめてみたいと思う。

１．この９年間における入学試験の変化について

①入試方法の多様化

以前は推薦入試と前期および後期学力試験だけであったが、センター試験利用入試が加わった。さらに来年度から、このセンター試験利用入試は前期日程と後期日程の２種類に分けられる予定である。

また、従来は推薦入試と同時に行なわれていた編転入試験が独立して、早い日程で行なわれるようになった。この編転入試験には専門学校卒業生の受験も認められるようになった。新たに外国人留学生も導入された。また、付属高校からの選抜方法についても変更された。このように入試選抜方法はこの９年間で非常に多様化した。

②推薦入試

・特Ⅰ、特Ⅱ推薦の導入

平成５年度入試から競技実績が高い者を入学させる特Ⅰ推薦、全国の県下屈指の優秀高校を指定校とする特Ⅱ推薦が導入された。特Ⅰ推薦の出願条件は当初「重点種目の全国大会ベスト３以内の主力選手」とされていたが、徐々に見直され平成13年度入試では「重点種目の全国大会ベスト８位内の主力選手、およびその他の指定種目の全国大会２位以内」とされる予定である。また、特Ⅱ推薦の指定校についても見直しがなされている。

・一般推薦入試の出願条件の変更

平成３年当時には推薦志願者に対して高校の競技実績からスポーツ得点をつけて、書類選考を行なっていた。その後、出願条件として、競技において全国大会に出場することが出願条件となった。さらに平成11年度入試からは出願条件が外され、実績が無くても受験することが可能となった。

・一般推薦入試の「小論文」

「小論文」には論文形式の出題と、漢字などの国語に類する問題が出題されているが、最近では国語に類する問題の比重が大きくなってきた。また、採点が円滑になるようにマークシート式が導入された。

・一般推薦の実技優秀者

実技優秀者については当初145人（特Ⅰ推薦を含む）であったが、徐々に減少させ、平成12年度入試からは105人となっている。

・推薦入試入学者数

推薦入試入学者数について、９年前では全入学者の５割弱であったものが、一時３割以内に抑えられ

*教授

た。最近では再び５割弱程度（付属高校を含む）に戻された。

③学力入試

前期学力入試が学力重視型のＤ方式と競技力重視型のＥ方式に分けられた。また、前期学力試験において、受験日が１日だけであったのが２日となり、受験生にとっては２回受験することが可能となった。試験科目は英語・国語の２科目であったものが、Ｄ方式では英語・国語・数学から２科目選択、Ｅ方式では英語・国語・数学から１科目選択となった。Ｄ方式の実技試験（２次試験）は運動能力テスト、Ｅ方式の実技試験（２次試験）は種目別技能テストとなった。

後期試験方法についてはＤ方式に準ずるものを行なうこととなった。

④センター試験利用入試

平成11年度よりセンター試験利用入試が導入された。科目は３科目で少なくとも英語・国語・数学の内から２科目が含まれることとなった。実技テストは課さないで合否判定することとなった。

⑤付属高校

中京高校の付属化に伴なって、入学者の枠が広がった。選抜については高校内の試験の席次によって行われることとなった。

２．これからの入試に関する私見

まず、推薦入試については如何に優秀な競技者を集めるかが益々重要になってくると思われる。優秀な競技者の質と数が常に考えられるべきである。今後競技者のレベルが落ちてくるようであれば、クラブ指定の実技優秀者を含めて一般推薦者の数は減少させる方向で考えた方がよいと思われる。その代わり、特Ⅰ推薦については出願資格を整備した上で、拡大することが考えられる。現時点では推薦入試入学者数の制限（付属高校入学者を含めて全入学者の５割以内）があるので、特Ⅱ推薦についてはむやみに拡大することができない。しかし、一般推薦の質が落ちるような場合、または学部の定員が増える場合においては、特Ⅱ推薦は拡大の余地がある。

前期学力試験Ｄ方式の選抜方法（一次：地方会場での学力試験、二次：豊田での実技試験）についてはこのまま続けたほうが無難である。簡略化のため実技試験をなくすとの案もあるが、体育学部としての独自性が失われる危険性があるからである。Ｅ方式についても選抜方法は維持するが、出願状況を見ながら入学者数（定員）を柔軟に変化させる必要がある。後期学力試験については、今後発展性がないので、時期をみて廃止することが望ましいと考える。

センター試験利用入試は実技試験がないが、他の私学体育系学部で導入しているところが少ないので、非常に効果をあげている。これからも、積極的に展開してゆくべきと考える。

体育学部にとってどのような学生を入学させるかは大きな問題であり、入試選抜方法については毎年のように論議が繰り返されてきた。さらにこれから10年間は学部の質を保つために試練の期間であり、入試出願者の人数や質を見ながら適切な入試を考えていかなければならないと感じている。